第 83 回中部日本・日本語学研究会
2019 年 7 月 27 日（土）於刈谷市総合文化センター

ム系助動詞の従属節への取り込み

北﨑 勇帆（高知大学）
yuho@kochi-u.ac.jp

1　はじめに

現代語において助動詞ウ・ダロウの出現位置は文末に偏り，意志・推量の意においては連体修飾の用法を持たない。これら，意志・推量に関わるム系助動詞[1]が文の（終助詞の前などを含む）終止位置以外に現れるのは極めて限定的である（三原 1995 など）。

(1)　a. あの人はきっと来る｛だろう／はずだ｝。
　　b. 明日は研究会に行こう。

(2)　a. 来る｛?? だろう／はずの｝人が 3 名いる。
　　b. 明日｛* 行こう／行く｝研究会が中止になった。

(3)　a. 不要な手術でも受けようものなら，かえって体が悪くなると思うのです。
（前山和宏『どんな手段を使っても病気を治す』［2004］PB44_00163,93140[2]）
　　b.“ 空振り ” はれっきとした “ ストローク ” だから，球が転げ落ちようと転がるまいと，打ったことになる。
（今井汎『わかりやすいゴルフのルール』［2003］PB37_00048,23020）
　　c. 外国語は相手のしゃべっている内容が理解できれば，こちらがしゃべるのは少々文法が間違っていようがいまいが大丈夫のようである。
（前興治『健康法あれこれ』［2003］PB34_00039,10230）
　　d. デビュー戦から優勝を飾った GT-R に，もはや敵などあろうはずがない。
（秦直之『ニッサン・スカイライン R32 GT-R』［2003］PB3n_00166,21140）
　　e. お釣り二百円頂くのに，レジに電話がきて，あろうことか勘違いしてお釣りの二百円渡すべきところ，お会計の勘定九千八百円を渡したそうです。
（Yahoo! ブログ［2008］OY03_08030,3050）

一方古代語においては，ム系助動詞が非終止位置に立つのは特殊な現象ではない。「仮定・婉曲」というのが教科書的な説明であるが，その意味を積極的に認めることはできない（山本 2003 など）。ここではむしろ，ムは当該事態が非現実であるものと話し手が理解していることを標示する形式であり，それが終止位置で用いられることによって，意志や推量の意が表出するものと考える[3]。

1　本発表ではム・ラム・ケム・（ヨ）ウを「ム系助動詞」，ベシやマジも含めた推量周りの助動詞を含めて「推量系の助動詞」と呼ぶ。

2　BCCWJ, CHJ からの用例にはそれぞれサンプル ID と開始位置を付す。

3　連体形のムの解釈について，野村（1995），重見（1998），尾上（2001, 2012），山本（2003），高山（2005），栗田（2014, 2019）などがあるが，本発表ではこれ以上は立ち入らない。

(4)　a. 思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。

（枕草子 7［1001］20- 枕草 1001_00005,40）

b. 月のいでたらむ夜は，見おこせたまへ。（竹取物語［9C］20- 竹取 0900_00001,187170）

この非終止位置のムは近世頃を境として生産的でなくなることが知られており（土岐 1992），差し当たり，上記（3）の限定的な用法が古代の非終止位置のムから引き継がれたものと考えるならば，現代語における用法の棲み分け（金田一 1953）は，非終止位置のムの衰退と並行する形で，いくつかの用法が固定化して残存したものと見ることになり，ここに「非終止位置・連体用法のムの固定化と衰退」という歴史が描かれることになる。

連体用法	—…	（固定化した）連体用法 （あろうことか，～うものなら，…）
終止用法（意志・推量）	—→	終止用法（意志・推量）

しかし一方で内実を細かく見ていくと，ム系助動詞がむしろその後接要素を広げている，すなわち，非終止用法を新たに獲得していると見られる事例が複数あることに気付く。

その事例の一つに「（よ）うと」「まいと」「（よ）うが」「まいが」の一群の複合辞の成立がある。ムは上に述べたように非現実領域に関わるので，本来は仮定という未来の事態に関する形式であるトモ節には包含されない（小田 1990）が，中世に至って「ム＋トモ」の承接を獲得する（5a）。これがウト（モ）の形で固定化（5b）[4]し，近世に接続助詞ガにも波及した（5c）ものと考えられる（北﨑 2019）。

(5)　a. 男，「実ニ今ハ生ムトモ殺サムトモ只御心也」ト云ケレバ，

〔生かすのも殺すのも（あなたの）お心次第です〕　（今昔物語集巻 29-3［12C 初］4-139-12）

b. 清人（清人 刺文公也 高克好利 而不顧其君）—此詩は鄭の文公を刺たぞ。高克は鄭の大夫ぞ。財利を好うで，主はなにと有うとまゝよと云て，利を本にしたぞ。

（毛詩抄巻 4［1539］1-358-10）

c. 二世とかねたるおつとのさいごをみて．女の身として帰ろふか．我もこわいたけはこはし．こおうないといふてからは　するが（駿河）丸様でござろうがおにであろうが．へちまのかは共ぞんぜぬ．　（日本記素戔嗚尊［1701 演］443 上 2）

また，中世後期には以下のような（6a）ウナラバ，（7a）ウバの例も見える（蜂谷 1977，小林 1979）。これらもやはり，それまでナラバ・バに包含され得なかったムが当代に至ってその接続可能性を拡張したものである。これは上の（ヨ）ウトの一群とは異なり，現代では基本形で表したいところである。

(6)　a. サウダニアラウナラバ，死ナウヲモ，ナントモ思ワヌゾト云ゾ。

（史記抄・秦本紀［1477］1-325-5）

b. そのようにさえ｛* あろうなら／あるなら｝，死ぬことをも，なんとも思わない。

4　アリや形容詞などの非意志的述語への接続をもって，意志文の環境という制約を受けなくなったものと考える。

(7)　　のぼらせられふば，おともいたさふ

（虎明本狂言集・宗論［1642 写］40- 虎明 1642_06026,5470）

以上の事例は，上述の「ム系助動詞の非終止位置･連体用法の固定化と衰退」に対して，次の予想を提示する。

- 現代語の非終止用法と終止用法の棲み分けは上代・中古から存したものをそのまま引き継いだのではなく，歴史的所産による部分がある。
- ムの性質の変化は，終止用法と非終止用法の境界を越える形で起こり得る。
- また，ムは仮定に関わる従属節内にも入り込み得る。
- ムの非終止位置における新用法は，連体用法の衰退時期と目される近世に至っても新たに生産されている（e.g.（よ）うが・まいが）。

現代語におけるム系助動詞の非終止用法の生産性は確かに失われているため，「非終止用法の衰退と固定化」という帰着点に疑義を挟む余地はないが，それは現代のあり方が中古のそれからの単調減少であることを意味しない。その過程において，新用法が生産されることもあれば，それが現代に引き継がれるといったことも十分に考えられるのである。

こうした新用法の発生を，北﨑（2019）では条件表現側における特定の新形式の生産という観点から，蜂谷（1977），小林（1979）は特定の条件表現形式における承接可能性の増大という観点から取り上げているが，ム側からの整理はほとんど行われてこなかったように思う。「従属句に入らなかったムが入るようになる現象」として，統一的に説明することはできないだろうか。

以上の前提に基づき，本発表ではまず，以下のプロセスにより，「ム系助動詞がどのような形式に接続し得たか」という観点からの当該問題の整理を試みる。

- まず，ム系助動詞（と意味的に隣接する助動詞群）が，各時代においてどのような形式を後接し得たかを調査することで，「非終止用法の衰退」の経緯を観察する。
- その中から，ムへの接続のあり方に変化が見出だせる形式をピックアップし，それら各形式がどのような形式を前接し得たかを調査する。

その上で，確かに非終止用法が新たに生まれた時期の存したことを提示し，それがなぜ起こり得たのかということを考えたい。

2 「非終止用法の衰退」の内実

上に見た「非終止用法の衰退と固定化」の流れについて，その説明がどれだけの有効性を持つのかを，以下の調査資料・方法により確認する。

- 国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』（以下 CHJ）
  - 対象：奈良 - 万葉集，平安 - 仮名文学，鎌倉 - 説話・随筆（コアのみ），鎌倉 - 日記・紀行，室町 - 狂言，室町 - キリシタン，江戸 - 洒落本，江戸 - 人情本，明治・大正 - 雑誌（コアのみ），明治・大正 - 初期口語（非コア）
    - 室町は韻文・ト書きを除き，江戸は会話文のみ，近代雑誌は口語のみ
  - 語彙素「む | むず | う | うず | らむ | ろう | けむ | じ | まい | まじ」かつ，品詞 - 大

分類 - 助動詞
    - ク語法は除外，マジはマジイのみを採る
  - 活用形 - 大分類 - 意志推量形
- 国立国語研究所編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）
  - コアデータのみを対象
  - CHJ と同様の検索条件
- CHJ に収録されない資料群として，以下を追加調査
  - 前期抄物より『史記抄』，後期抄物より『玉塵抄』（巻 1 のみ）[5]
  - 近松世話浄瑠璃 24 作品[6]

以上の検索により得られた約 41,000 例を「その直後にどのような要素が来るか」という観点で分類する。

- a. 終止位置
  - a1. 主節末（係り結び含む）
  - a2. 主節末付近（終助詞後接など）
- b. 非終止位置
  - b1. 従属節末
  - b2. 連体形による準体句末
  - b3. 連体位置
    - b3-1. 一般名詞・固有名詞
    - b3-2. 形式名詞

(8) a. 何人ならむと問へば,「明石の浦より，前の守新発意の，御舟よそひて参れるなり。源少納言さぶらひたまはば, 対面して事の心とり申さん」と言ふ。〔お目にかかって，子細を申しあげたい〕 （源氏物語・明石［1010 頃］20- 源氏 1010_00013,28330・a1 主節末）

b. 年の終はりには，なにごとにつけても，思ひ残さざりけむかし。
〔年の終りには，何事につけても，ありとあらゆる物思いをし尽したことであろうよ。〕
（蜻蛉日記中［975 頃］20- 蜻蛉 0974_00008,20430・a2 主節末付近）

c. その二百の切に汝が心も分れて，切ごとに心のありて，責められんに随ひて，悲しくわびしき目を見んずるぞかし。
〔その二百の切れにおまえの心も分れて，一切れごとに心があって，責めさいなまれるにつれて苦しくつらい目をみようというわけだ。〕
（宇治拾遺物語巻 8-4［1220 頃］30- 宇治 1220_08004,9140・b1 従属節末）

d.「それならば身どもがうつてやらう程に，それにおまちやれ，
（虎明本狂言集・はりだこ［1642 写］40- 虎明 1642_01015,10260・b1 従属節末）

5 それぞれ以下による。
- 『史記桃源抄の研究』日本学術振興会／住谷芳樹氏作成テキストデータを検索に使用
- 鈴木賢祐・康凱欣・大島英之・小池俊希・北﨑 勇帆「東大国語研究室蔵『玉塵抄』解題と翻刻（一）」『日本語学論集』15

6 CHJ 公開予定の構築中データ（底本は新全集）を使用させていただいた。

e.「げに目の前にゆゆしきさまにて死なんを見んよりは」とて取らせつ。
〔いかにも目の前で，無惨なさまで死ぬのを見るよりは〕
（宇治拾遺物語巻 10-6［1220 頃］30- 宇治 1220_10006,8430・b2 準体句末）

f. 元の妻どもは，かぐや姫をかならずあはむまうけして，ひとり明かし暮らしたまふ。〔かぐや姫とかならず結婚しようと考え，準備して，一人で生活していらっしゃる〕
（竹取物語［9C］20- 竹取 0900_00001,88770・b3-1 一般名詞）

g. まゐらむをりは，その事見入れ，思はむさまにして，出だしたてなどせばや。
〔また，その宮仕え人たちが主君のもとへ参上する折には，そのことの世話をして，思いどおりのありさまにして，家から出してやりなどしたいものだ。〕
（枕草子 284［1001 頃］20- 枕草 1001_00284,2440・b3-2 形式名詞）

以上の用例収集と分類をもとに集計を行ったのが，次頁の図 1・2 である。文体差や地域差を考慮しない大雑把な分析ではあるが，以下の点が指摘できる。

- 終止用法は一貫して多く，
- 準体句末の例は中世後期以降（1450-）に減少
- 中世後期以降，従属節末の例数が増加する
- 連体用法（一般名詞＋形式名詞）は，全体として，近世後期以降（1750-）に例数の減少が顕著（→連体用法の衰退）
  - 中世後期に特に形式名詞に接続するものが増加[7]
  - 同時に一般名詞に接続するものは減少

すなわち，非終止用法は確かに全体としては衰退するが，その過程では，非終止用法内において，一般名詞への下接例の減少，従属節末の例の増加が見られるのであり，冒頭に示した問題が確かに存することが，ひとまず計量的に確認できる。個々の連体用法の固定化の過程は今回は措き，以降，標題の「ム系助動詞の従属節への取り込み」について見ていく。

3　従属節への取り込み

本来ある従属節に入り得なかった助動詞が，当該従属節の形式を下接するようになることを指して「取り込み」と呼ぶこととする。例えば中古において，ム・ラム・ケムはツツ・テ・トモ・未バ・已バを後接できない（小田 1990, 1994, 高山 2002）が，後世に至ってムトモの例が見られるようになる（すなわち，トモ節に取り込まれる）のは上に述べた通りである。

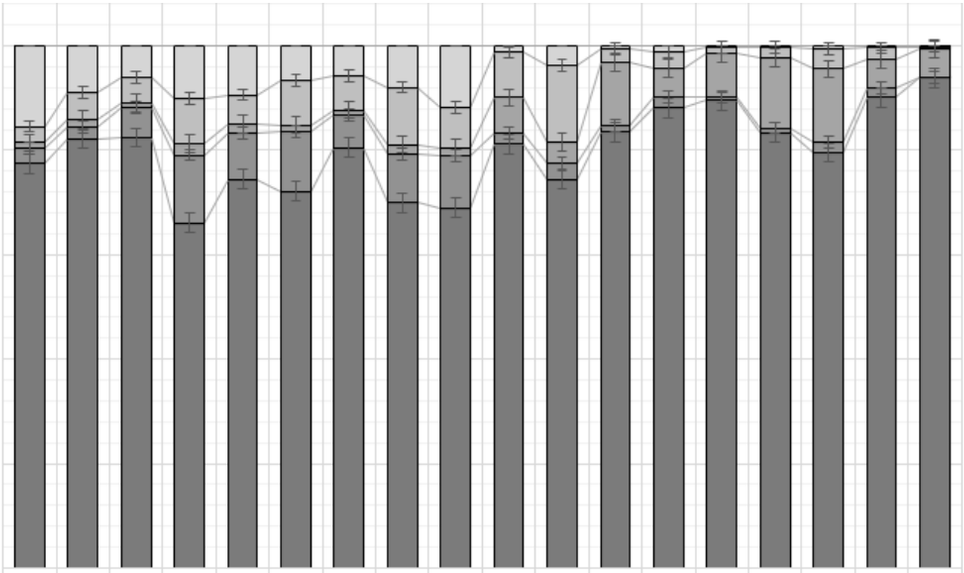
以下，南（1993）において，ウ・ヨウ・マイ・ダロウを含む C 類従属句とされるガ[8]・ケレド・シ・カラ，その他，ホドニ・ナラバ・バ・トモ・ニヨッテの事例を見ていく。

3.1　ガ$_1$

ガは現代語においては一括して C 類従属句とされる（南 1993）が，以下の統語的差異が

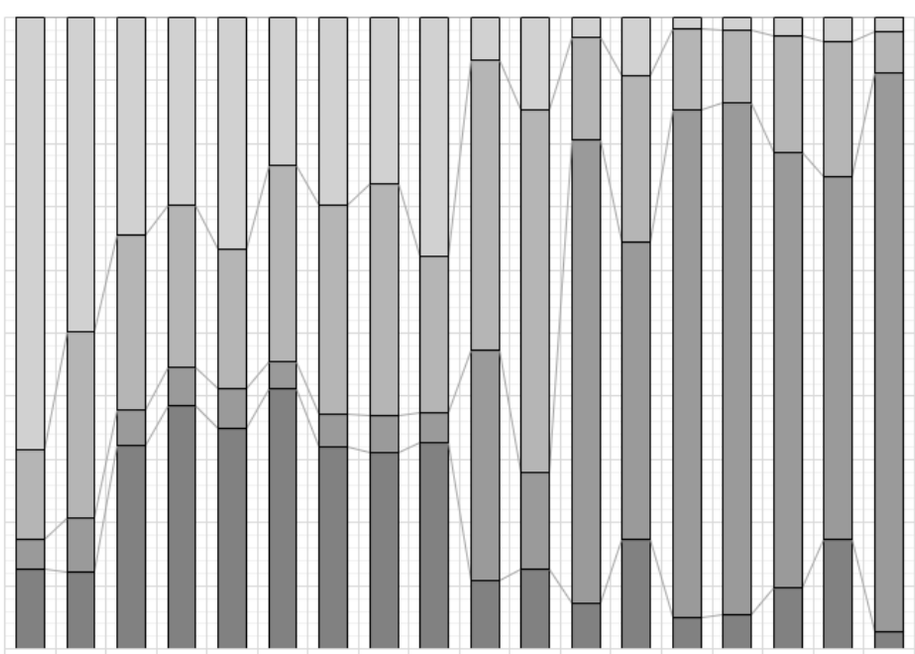
7 「「う」「よう」の下に来る体言は，局限されて数語に過ぎない」（湯澤 1954：376）

8 「〜でありまして」のようなテや連用形も C 類に含まれるが，これはウを含まないので措く。



	750	900	950	1000	1050	1100	1200	1250	1300	1450	1550	1600	1700	1750	1800	1850	1900	2000
一般名詞	15.4%	8.9%	6.1%	10.1%	9.4%	6.5%	5.8%	7.9%	11.8%	1.3%	3.8%	0.5%	1.1%	0.2%	0.4%	0.6%	0.4%	0.1%
形式名詞	3.2%	5.3%	4.9%	8.7%	5.6%	8.6%	6.4%	11.0%	7.7%	8.6%	14.7%	2.6%	3.1%	1.3%	1.9%	3.8%	2.1%	0.4%
従属節末	1.1%	1.5%	1.0%	2.1%	1.6%	1.2%	1.0%	1.8%	1.5%	6.8%	4.0%	12.1%	5.6%	8.4%	13.4%	14.1%	5.7%	5.4%
準体句末	2.9%	2.2%	5.6%	13.0%	8.9%	11.5%	6.3%	9.3%	10.1%	2.1%	3.2%	1.2%	2.1%	0.5%	0.9%	2.0%	1.7%	0.2%
終止	77.5%	82.2%	82.5%	66.1%	74.5%	72.1%	80.5%	70.0%	68.9%	81.2%	74.4%	83.5%	88.1%	89.6%	83.4%	79.5%	90.1%	93.9%

図１　ム系助動詞の出現位置



	750	900	950	1000	1050	1100	1200	1250	1300	1450	1550	1600	1700	1750	1800	1850	1900	2000
一般名詞	68.5%	49.7%	34.5%	29.8%	36.7%	23.4%	29.8%	26.4%	37.9%	6.7%	14.8%	3.3%	9.2%	2.0%	2.2%	3.0%	4.0%	2.2%
形式名詞	14.1%	29.6%	27.7%	25.5%	22.0%	31.0%	32.9%	36.6%	24.8%	45.9%	57.2%	16.0%	26.5%	12.7%	11.5%	18.4%	21.3%	6.7%
従属節末	4.8%	8.4%	5.6%	6.3%	6.4%	4.4%	5.2%	6.0%	4.7%	36.4%	15.4%	73.5%	47.1%	80.4%	80.9%	68.9%	57.3%	88.3%
準体句末	12.7%	12.3%	32.2%	38.4%	34.9%	41.2%	32.1%	31.0%	32.6%	11.0%	12.6%	7.2%	17.3%	4.9%	5.5%	9.7%	17.3%	2.8%

図２　ム系助動詞の出現位置（終止位置を除く）

存することに基づき，一般的な逆接のガをガ$_1$，「～ようが～まいが」のガをガ$_2$としておく。

(9)　a. 確かに彼は旅行に行くだろうが，私には関係のないことだ。

b.* 確かに彼が旅行へ行こうが（行くまいが），私には関係のないことだ。

このガ$_1$は成立当初の中世前期（石垣 1955）においては推量系の助動詞を包含しない[9]。

(10)　a. その時はわびしう，堪へがたく覚え候ひしが，おくれ参らせて後は，などさ覚え候ひけんと，くやしう候ふなり

（宇治拾遺物語巻 5-8［1220］30- 宇治 1220_05008,15850）

b. 木曽義仲ハ都ノ守護ニテ有ケルガ，ミメ形キヨゲニテ，吉男ニテ有ケレドモ，立居ノ振舞ノ無骨サ，…浅猿（アサマシ）クヲカシカリケリ。

（延慶本平家物語巻 4［13C］下 145-5）

ガ$_1$が推量系の助動詞を包含するようになるのは室町に入ってからのようである。応永本論語抄にはマジキガの例が目立ち，史記抄にはウガの例は 1 例しかなく，ウズガ（15 例）・マイガ（6 例とマジイガが 1 例）の例に偏る。

(11)　a. 他人ノ勢アル者ナラハ，吾ウデニテハエ殺スマジキガ，伯寮ニ於テハ吾力ニテナリトモ，子路ガ罪ナキヨシヲ季孫ニ聞テ市朝ニ殺シテノケント云。

（応永本論語抄・論語憲問第 14［1420］589-1）

b. 礼ヲ知ラバ何事ヲモ問マジキガ，大廟ニ入テ政ヲ相ケラル丶時何ヲモ不知シテ，一々ニトハレタリ。（応永本論語抄・論語八佾第 3［1420］160-2）

(12)　a. 周公ハ，聖人ナリ。文王之子，武王之弟，成王之叔父ナレバ，太伯ニハ，ヲトルマジイガ，ナゼニ太伯ヲ先ニシタゾナレバ，サリトテハ，…

（史記抄・太子公自序［1477］5-405-3）

b. タテヌキガ，各十二里ナラバ，四方ニ四十八里デ，アラウズガ，ナントシタレバ，六十三里ハ十五里ノ入レシヲガアルカ，ドコヘ入タヤラウゾ。

（史記抄・呂后本紀［1477］2-181-17）

c. サウシテモ，好悪（ヲ）カ，齊ノ風俗ニチガウタラバ，国ハ治ルマイガ，ヨク好悪（ヲ）ヲ同ジウシタホドニ，ヨク治タゾ。（史記抄・管晏列伝［1477］3-25-9）

室町末期，キリシタン資料ではウガの例が一般的に見られるようになる。なお，現代語では意志の場合にガを承接できない（* 中部の研究会に行こうが，台風が来てしまった）が，当代にはそういった制約はないようである[10]。

(13)　a. 戦場へさえ赴かせられば，真っ先を駆けまらせうが〈caqemaraxôga〉，これは参らずとも，苦しかるまじい（天草版平家物語巻 4-15［1592 刊］40- 天平 1592_04016,1950）

b.「それは時のざれ事であらふが，真実はどれへござるぞ

（虎明本狂言集・餅酒［1642 写］40- 虎明 1642_01006,5420）

9　CHJ 鎌倉時代編，ならびに延慶本平家の簡易的な調査による。

10　近世においてはダロウの承接がウ・ヨウと比べて遅れることが指摘されており（鶴橋 2013），形式の発達と取り込みとが関係性を持つことが示唆される。

3.2　ケレドモ

ケレドモ（現代語ではC類）の成立過程には諸説[11]あるが，ここではマイの已然形の「マイケレ＋ドモ」の再分析説（湯澤 1929，西田 1978）を採る。マイケレドモの例をケレドモの例として認めるのであれば，ケレドモは当然ながら成立当初からマイを前接することになる。

（14）　a. 根本は父母と媒酌とが定る時には，女の訴訟する事は有まいけれども，詩人がかう作りなすぞ。　（毛詩抄巻 1［1539］1-94-15）

b. 門東ト云テ，タイ所ヤ，庫裏ニハ，必ナルマイケレドモ，一往ノ定メカ，台所ノ，門ヲ，東ニシタ程ニソ，　（玉塵抄巻 1［1563］4 ウ）

ウの承接例はそれから遅れて現れるが，ロドリゲス『日本大文典』には既にウケレドモの例が見える。

（15）　a.Agueô queredomo, l. Tomo, l. tomama（上げうけれども，又は，とも，又は，とまま）。これら三つの助辞の中一つを未来の第一の形に添へて作る。　（ロドリゲス日本大文典［1604 刊］固有な接続法・未来，p.76）

b. 今日の働き，半日払ひにせうけれど．なまなか半手間取らうより，頼みの祝に皆進上にさつしやれと．お内儀様の言渡しと，　（薩摩歌［1704 演］296-3）

3.3　シ

シ（C類）の成立は室町末期であるが，成立当初にはマイシの例しかなく，それに遅れて近世にウシの例が見られる。鈴木（1990）はこの点を以てマイ＋「不十分終止に類推させた形容詞語尾シ」によるマイシを接続助詞シの源と考えるもので，本発表もこれに従う。

（16）　a. 今からは酒もたべまひし，ましていさかひも致まひ，このたびはかんにんしてくだされひ　（虎明本狂言集・乞聟［1642 写］40- 虎明 1642_03013,23700）

b. 恥を捨てて言うたらば，国の迎ひが蔵屋敷で．つい金を調へ，国へ連れて帰らうし．時にはこなたと縁切れる。　（心中刃は氷の朔日［1709 演］247-4）

以上のガ$_1$，ケレドモ，シについて，ガ$_1$においてはマジイ・マイ・ウズの例が先行し，ウの取り込みは遅れるである。ケレドモ，シにおいてはそもそもマイが成立に関与し，ウがそれに続く形で承接を獲得する。いずれもウが後発的である点に注意したい。

3.4　カラ

カラは現代語において幅広い助動詞を包含するが，その成立は明らかでなく，「カラニのニ脱落説」と「格助詞カラの用法拡大説」（石垣 1955）がある[12]。近世後期江戸語のカラに絞って見ると，ウの付き始めはやや遅いようにも見えるが，誤差のようにも見え，用例に乏しいのでここでは保留せざるを得ない。

11　マイ説のほか，形容詞已然形説，助動詞ケリ説，形容詞ナシ説があるが，後 3 説はケレドモが分出される条件を満たさない。

12　ムカラニのニ脱落を考える説（小川 2004）があり，これを採るならば当初からムが接続できたことになる。

(17)　a. あのじやんこめがふぐ喰にあいべといひやがつたから内にねたあはなしのよふなこつたよ　（郭中奇譚［1769 刊］52- 洒落 1769_01001,79200[13]）

b. 金 もう夜があけるそふだ。坂見屋も来やせふから。きげんを直しなせんし

（甲駅新話［1775 刊］52- 洒落 1775_01010,130080）

なお，南（1993）において，ウ・ヨウ・マイ・ダロウは一括して扱われているが，ガ$_1$と同様，その意味が推量であるか意志であるかによって容認度は大きく変わる。

(18)　a.「いや，勉強になりました。お疲れでしょうから，わたしはこれで」

（森岡浩之『星界の断章』［2005］PB59_00010,28020）

b. そこらへんは，流石にどこの会社も書かないだろうから，個人のレポを見るしかないかな？　（Yahoo! ブログ［2008］OY07_00831,23720）

c. 魏使とて現在のように正確な測量機器をもってまさか旅をしていたわけではあるまいから，里数はあくまでも目安だ。

（篠田秀幸『卑弥呼の殺人』［2005］PB59_00606,32860）

d.* 来月から貯金をしようから，外食は控えよう。

すなわち現代語において，意志を表す場合にはカラに包含されないのであるが，江戸語には意志（否定意志）を承ける例がある。

(19)　a. 綱　ほんにあの時はわつちもいつそ酔いしたよ　三　そんならちつとつぎんしようから出しなんし　（甲駅新話［1775 刊］52- 洒落 1775_01010,60300）

b. 米「気の毒なら仇の字のわけを止ておくれとはいふめへから少し遠慮にしておくれな　（春色辰巳園初編巻 3［1833 刊］53- 人情 1833_04003,40260）

3.5　ホドニ

ホドニは中世後期の段階に至って初めてウを承接するようになる（吉田 2007）。応永本論語抄にはマジキホドニの例のみが見られ，ウズ・ウの承接はやや遅れるようである。史記抄にはウホドニの例は（21a）のみで，ウズホドニ 69 例，マイホドニ 21 例と偏りがある。

(20)　a. 有若答云，上ヘ十分一ヲトラハ百姓ガ業ヲステマジキホドニ家々皆富貴スベシ。

（応永本論語抄・論語顔淵第 12［1420］502-9）

b. 今日以後ハキズツクコト有マイホドニ我身ヲ不毀傷シテ，不孝罪ヲ免タリト云。

（応永本論語抄・論語泰伯第 8［1420］360-4）

c. マヽ子ノ立レウズホドニ，カウシテ我ガ天下ヲハカラワウトテゾ。

（史記抄・呂后本紀［1477］2-188-4）

(21)　a. スルニ，カタカラウホドニ云ワニモ訌（カタウ）ナウテハカナウマイゾ。

（史記抄・弟子列伝［1477］3-133-14）

b. 吾西ノ方天竺エ渡ラフ程ニ，サアラバ，ソチモ，西ニ，ムカイテ，枝ヲ，西エサイテ，ナガ／＼ト，サカヘヨ，　（玉塵抄巻 1［1563］43 上 2）

13　この箇所，上方で改作された『異本郭中奇譚』では「砂場へうどんくひにいこほとに内にまつてゐよといひ上つたよつてうせるかとおもふて」とある。

3.6　ナラバ

ナラバは「連体形＋ナラバ」からその領域を広げるものである（小林 1996）が，ナラバの素材である連体ナリはムを上接しない（北原 1981）ため，当初はムを承接せず，現代語のナラもウを承接しない。しかし，(6,7) に示したようにその中間段階においてはウを承接し得た時期がある。延慶本平家物語にはベキナラバ・マジキナラバのみがあり，ムナラバの例はないが，応永本論語抄に至ってンナラバの例が見られるようになる[14]。

(22)　a.「…三井寺ニテ御潅頂アルベキナラバ，延暦寺ヲ大衆発向シテ，園城寺ヲ焼払ベシ」ト僉議スト聞ヘケレバ，（延慶本平家物語第 2 本［13C］上 217-16）

b.「我願成就スマジキナラバ，今日ヨリ七日ガ内ニ命終ベシ」ト誓テ（延慶本平家物語第 2 末［13C］上 482-9）

c. 富ヲ求ヲ求メンナラバ, カヤウノ職［＝賤シキ職］ト云トモスベシ。◯如不可（求従吾所好）―非分ニ富ヲ求マジキナラバ，我好ム■処ノ古人ノ道ニ従ント也。（応永本論語抄・論語述而第 7［1420］317-4）

3.7　トモ・ガ$_2$

既に述べたように，中古においてトモ節はムを包含しないが，中世前期にはムトモの例が見られ，当初は意志文環境に限られていたものと考えられる。ヨウガ・マイガは，逆接条件体系におけるガの伸張を背景とし，ガがこの表現に類推的に適用されたことで複合辞化したものと見る（北﨑 2019）。

(23)　a. 男，「実ニ今ハ生ムトモ殺サムトモ只御心也」ト云ケレバ，（今昔物語集巻 29-3［12C 初］4-139-12）

b. 清人（清人 刺文公也 高克好利 而不顧其君）―此詩は鄭の文公を刺たぞ。高克は鄭の大夫ぞ。財利を好うで，主はなにと有うとまゝよと云て，利を本にしたぞ。（毛詩抄巻 4［1539］1-358-10）

c. 二世とかねたるおつとのさいごをみて．女の身として帰ろふか．我もこわいたけはこはし．こおうないといふてからは（駿河）するが丸様でござろうがおにであろうが．へちまのかは共ぞんぜぬ．（日本記素戔嗚尊［1701 演］443 上 2）

3.8　ニヨッテ

中世後期以降に勢力を伸ばすニヨッテは当初ムを包含しないが，時代を下った虎寛本（1792 写）にはウニヨッテの例が見られる（小林 1973, 李 1998）。マイニヨッテの例も同様にあり，承接可能になった時期に差はないようである。

(24)　a. イヤ，先待て。身共も奇特が見度い程に，是を汝にかして遣うに依て，着て見せい。（虎寛本・隠笠［1792 写］1-127-8）

b. 又見へぬ国へいたならば，再参詣致す事も成まいに依て，是より御暇乞に清水へ参うと存る。（虎寛本・武悪［1792 写］1-359-1[15]）

14　(22c) はマジキナラバと肯否が対応する形でンナラバが用いられている点，注目される。

15　虎明本ではマイホドニとある箇所。

4　ム側の歴史から考える

これらのうち，特に，推量形式の付き始める時期に差異のあるものについて考え，ム側の歴史からの説明を試みたい。

- 中世前期成立のガ$_1$は，マジキガ・ウズガ・マイガが先行し，ウガが遅れる。
- 中世後期成立のケレドモはマイケレドモに由来するので当初からマイを承接し，遅れて室町末期にウケレドモも見られるようになる。
- 中世後期成立のシはマイシに由来するのでこちらも当初からマイを承接し，遅れて近世前期にウシも見られるようになる。
- 中世前期に因果の用法を獲得するホドニは，中世後期に至ってマジキ・マイ・ウズを承接するようになり，それから遅れてウホドニの例が見られる。
- 中世以降に用法を拡張するナラバは，中世前期にベキナラバ・マジキナラバの例があり，後期にンナラバの例が見られる。

従属節とムとの関係性についてはこれまで，テンス・アスペクト体系の変化からの説明（福嶋 2011，吉田 2011）[16]，条件表現体系の側からの説明（蜂谷 1971，小林 1979，山口 1996，吉田 2007，2015，矢島 2012）[17]が行われてきた。しかしながら 3 節のように整理してみると，ムの取り込みは複数形式を横断する形で連続して起こっており，ムの側にも何かそれを起こすだけの要因があったのではないかとも考えたくなる。

ここで一度，推量系の助動詞の変遷を，特に本発表に関わる範囲で記述しておく[18]。

- 中古における推量周辺の助動詞にベシ・マジ・メリ・終止ナリ・ム・ラム・ケム・マシ・ジがあり，これは，ム系のム・ラム・ケム・マシ，アリ系のメリ・終止ナリ，形容詞系のベシ・マジ，終助詞的性格を持つジの 4 類に分けられる。

- もはや参ることも有まひほどに，いとまごひに参らふと思ふてきたれば，

（虎明本・武悪［1642 写］40- 虎明 1642_02031,51050）

16　福嶋（2011）は中世後期テンス体系の現在・未来の対立に基本形とウ・ウズ（ル）という対立を想定し，連体節にウ･ウズ（ル）が現れる理由を，未来以後を表す場合において「「現代日本語で動詞基本形を使用する場面で，～ウ・～ウズ（ル）が出現する」という現象」（福嶋 2011：58）であると説明する。吉田（2011）も同様，目的を表すタメニがムタメニの形を取る（現代語では基本形）ことを「タメニ節と主節との［後－先］という時間関係を表す場合に，主節以降の事態（＝主節から見て未実現の事態）を表すのにムが必要だった」（吉田 2011：113）ことに求める。

17　ウナラバについて，蜂谷（1971:17）は「「ならば」が仮定条件を示す慣用的表現として意識されるようになり，さらにその推量的意味から，より明確に「う」を伴った「うならば」としても用いられた」とナラバの慣用化の流れに位置付けるの対し，小林（1979：318）は逆に，「本来の非完了性仮定の方面に発達を続け文相当句をも自由に承接するに至った」と発達の流れに位置付ける。ウホドニに対する「その原因理由の表示性の明示化に伴うこと」（山口 1996：198），ウトモに対する「「とも」が単独で仮定を表す形式だと捉えにくくなっている」（吉田 2015：311，ウバも同様の現象と見なす）など，同様の見方がある。こうした，「形式の発達ないしは固定化に伴う承接の拡大」という観点以外のものでは，ホドニが已然形＋バの領域に進出したことをウホドニの成立に求める吉田（2007）があり，蜂谷（1971）はウバを単なるウ＋バではなくウニハ（外山 1969）が転じたものと見る。また，近世を対象とするものであるが，矢島（2012）は形態上，已然形による拘束を受けない形式（終止連体形＋ホドニ・ニヨッテ…）の出現によって自立性の高い構文が生まれたものと考える。

18　山口（1991），近藤（1993），高山（2011）による。

- 中世以降，ム系のうち，ムはウに，ラムはラウにそれぞれ音変化。ムズも同様にウズとなり，中世後期に多用される。ケムはツラウに取って代わられ，マシは衰退。アリ系のメリ・終止ナリも中古に衰退。ジも同様に中古には衰退する。
- ベシは中世に音便形ベイとなり，マジはマジイ（<マジキ）となった後，ベイとの類推によりマイとなる。

こうした経緯があるため，マイはウとの対立項ではあるが，意味的にはベシ・マジを引き継いでいる。ウズもまた，ウよりもむしろ，ベシと同様の意味領域を持つという（山田2001）。従属句への取り込みについて，マジ・ウズがウに先行する事例，もしくはマイそのものが素材となり，その後にウが承接を獲得する事例があることを前節に見たが，前者の場合，「客体的表現」（北原 1981）を担い，承接が広かったベシ系の意味を引き継ぐマイが承接可能になったことによって，肯否で対立するウがその影響を受ける形で接続可能性を広げたものと考えたい。後者も同様，マイが承接可能であったために，対立項にあるウも接続が可能になったのであろう。以上のことを図示すると以下のようになる。

	肯定		否定
接続広	ベキナラバ	↔	マジキナラバ
接続狭	＊ムナラバ	↔	＊ジナラバ

↓

	肯定		否定
接続広	ベキナラバ	↔	マイナラバ
	ウズルナラバ		↓
接続狭	ウナラバ	↔	（マイナラバ）

5　まとめ

ム系助動詞の終止用法・非終止用法の使用の推移について以下のことを述べた。

- ム系助動詞の非終止用法は全体としては衰退していくが，その内実，一般名詞に接続する連体用法が特に衰退し，従属節末においてはむしろム系助動詞が新しく取り込まれる事例が複数見られる。
- そのうち，ガ・ホドニ・ナラバはウよりもベシ・マジ（イ）・マイ・ウズの取り込みが先行し，マイを素材とするケレドモ・シにおいてもウの取り込みが起こる。
- マイは承接が広いベシ・マジの機能を引き継ぎながらも，体系的にはウと肯否で対立するという 2 つの側面を持つために，ウへと影響を与えることができたものと考えられる。

補　ロドリゲス『日本大文典』の活用記述

ロドリゲス『日本大文典』（1604 刊，以下『大文典』）[19]の記述を参照する。『大文典』は第 1 巻の半分ほどの量を活用に宛て,「話しことば」における動詞（上ぐる･読む･習う）･形容詞（深い）・形容動詞（明らかな）の活用と，「書きことば」における動詞・形容詞の活用を一覧する。これらのうち，本発表の対象とする形式を含む活用をまとめたのが別紙表 1 である。

例えば直説法の未来において，口語では，肯定にウ・ウズ・ウズル，否定ではマイ・マジイが，文語では肯定にベシ系，ン・ンズ・ンズル，否定にマジキ，ベカラズ，ザラン，ジが挙げられる。これに基づけば, 他の「活用」における「未来」や「完全過去」「大過去」についても，基本的には口語でウ系・マイ，文語でベシ系・ン系・マジといった対立を見せるはずであるが，以下に列挙するように，対立項は必ずしもその限りではない。

- 希求法・完全過去
  - 口語：｛ウ・マイ｝ モノヲ
  - 文語：｛ベキ・ン・マジ・マジキ｝ モノヲ
- 接続法・未来
  - 口語：｛ウ・マイ｝ トキ，｛ウズル・マイ｝ ニ，ウズルニハ，ウタメ，ウトテ，マイサカイニ
  - 文語：ベキトキ，｛ベキ・マジキ｝ ニ，｛ベケレ・マジケレ｝ バ
- 固有の接続法（Domo, Tomo を伴うもの）
  - 口語：｛ウズレ・マジケレ｝ ドモ，｛ウ・マイ｝ トモ・｛ウ・マイ｝ トママ
  - 文語：ベキトイエドモ，ベケレバトテ，｛マジケレ・ザルベケレ｝ ドモ
- 条件的接続法・大過去
  - 口語：ウニハ，ウニオイテハ，ウニコソ
  - 文語：タラバ，タルニオイテハ
- 条件的接続法・未来
  - 口語：｛ウズル・マイ・マジ｝ ナラバ，ウズルニオイテハ，ウニハ，マジクハ
  - 文語：｛ベク・マジク｝ ハ，ンニオイテハ，ベクンバ，マジケレバ
- 許容法・譲歩法・大過去
  - 口語：｛ウ・マイ｝ マデヨ
  - 文語：（大過去の項目なし）
- 許容法・譲歩法・未来
  - 口語：｛ウ・マイ｝ マデヨ，ウ ｛トモ・トママヨ｝，ウズレバトテ，ウニセイ，マイニセヨ
  - 文語：ベケレバトテ，タリトモ
- 不定法
  - 口語：｛ウ・ウズ・ウズル・マイ｝ コト，｛ウ・ウズ・ウズル・マイ・マジ｝ ト
  - 文語：｛ベキ・ン・マジ｝ コト，ベキヨシ
- 分詞
  - 口語：｛ウ・マイ｝ ｛タメ・トテ｝，｛ウ・マイ・マジ｝ モノ，｛ウ・マイ・マジ｝ ヒト，ウハ・ウヲ，ウトスルニ，｛ウズル・マイ｝ ニ，｛ウズル・マジ｝ トコロニ
  - 文語：｛ベキ・マジキ｝ ｛タメ・トテ・モノ｝，｛ベキ・ベカラザル｝ モノ，ントスル ｛モノ・ニ｝，｛ベキ・ン・マジキ｝ ニ，マジキトコロニ

併せて，関連する記述も見ておく。まず，形式名詞に接続する場合。

(25)　a. 未来では Coto（事），mono（もの），gui（儀）の語が為すべきであったといふことを意味する動詞の力を持ってゐる。即ち，為なければならなかった，言ふ

19　土井忠生訳（1955）『日本大文典』三省堂 を用いる。

義務があった，為る義務があったといふのと同じである。例へば，Mairŏ cotode gozaru（参らう事でござる），yuŏ cotode atta（言はう事であった）といふのは，言はねばならなかった，彼にそれを言ったことは必要であったの意である。書きことばでは Coto nari（事也），mono nari（者也），guinari（儀也）がそれに相当する。（直説法の時，p.46）

b. 例へば，Agueŏ toqui（上げう時）の如く，Toqui（時）の語を伴ったものは接続法の未来に使はれる。然しこの末来の正しい形は Agetarŏ toqui（上げたらう時）といふものである。（未来形 Agueô, zu, zu の種々な用法に就いて，p.52）

c. 未来と共に使はれた Domo（ども）は，往々義務があるといふ意味を示す。例へば，Mairŏ cotode attaredomo（参らう事であったれども）は，参らねばならなかったけれどもの意。Mairŏ cotode gozanacattaredomo（参らう事でござなかったれども）は，参るべきではなかったけれどもの意。Mairumajiqueredomo（参るまじけれども）は，参ってしまふべきではなかったけれどもの意。（固有な接続法・未来，p.77）

形式名詞による従属節に関連するもの。活用の一覧には見られないウホドニが，ウニと同義であることを示すのに使われている点，特に注目される。

（26） a.［Ni が］未来に接続した場合には，甚だ多数の意義と用法とを持ってゐるので，今それを明確な規則に立てる事は出来ない。何となれば，ある場合には Fodoni（程に）の意，即ち，理由を示し，他の場合には別の意味を示すのであって，それは次に掲げた色々の書物からの引例で見られる通りである。

例，Toquidoqui conataye coigana, Sŏmadonono catami tomo miônito vôxerareta.（時々こなたへ来いがな，相馬殿の形見とも見うにと仰せられた。）miô fodoni（見う程に）の意。「信太の舞」（XidanoMai）（他 3 例，直説法の時・助辞 Ni を伴ふ未来，p.55）

b. 未来の形の Agueôzurutocoroni（上げうずるところに）は，上げるべきであっての意である。（分詞，p.105）

c. 一般に，後に続く末来が過去を意味する時は，それに Monouo（ものを），Ni（に）が続くのが常であって，この場合には希求法のやうなものとなる。例へば，Voagueattaraba yocarŏ monouo（お上げあったらば良からうものを）：voague attaraba yocarŏzuruni（お上げあったらば良からうずるに），等。（条件的接続法，p.83）

d.Monouo（物を）は為された事柄に関する後悔・悔恨・不満を示す感動詞である。その支配関係は動詞の後に置くのが規則であるが，その動詞は常に未来形であって過去を意味するのである。例へば，Naguinatauo motte côzuru monouo.（薙刀を持って来うずるものを。）Coreuo xô monouo.（これをせうものを。）Fumiuo cacŏ monouo（文を書かうものを），等。（感動詞の構成，p.462）

助詞による従属節に関連するもの。ガ・ケレドモの承接例がある。

（27） a.Cono aidaua socomotoye sanzubequeredomo, temaye torimidaxi sorote buyn itaxi, &c.（この間は其処許へ参ずべけれども，手前取乱しそろて無音致し，云々。）先日来貴方へ参上すべきであったのにといふ意。同じことを Agueôzuruuo（上げうずる

を)，yomôzuruga（読まうずるが）等ともいふ。　（直説法・未来，p.53）

b. 往々末来の言ひ方の Agueôzuredomo（上げうずれども），Agueôzuruuo. l. ga（上げうずるを，又は，が）はこの法に使はれて，上掲の時に属する葡萄牙語のすべての言ひ方に当るものを持ってゐる。… Sayŏnaru ixiua faya sono quimpẽniua gozarumaiga, dochicara toriyoxeraruruca?（さやうなる石は早その近辺にはござるまいが，どちから取寄せらるるか。）　（可能法・未来，p.86）

c.Agueô queredomo, l. Tomo, l. tomama（上げうけれども，又は，とも，又は，とまま）。　（固有な接続法・未来，p.76）

d.Coreuo mŏsumai queredomo, votadzunearu fodoni, arino mamani mŏsu.（これを申すまいけれども，御尋ねある程に，ありのままに申す。）　（固有な接続法・未来，p.76）

e.Agueô niua（上げうには），Aguetarŏ niua（上げたらうには）の形は条件法に属する。… Agueôni coso（上げうにこそ）は，もしも上げるならばの意，Aguetarŏni coso（上げたらうにこそ）は，もしも上げたならば，又は，上げてあったならばの意であって，共に条件法に属し，強い力を持ってゐる。　（条件的接続法，p.83）

参考文献

李淑姫（1998）「大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について：その体系化のために」『筑波日本語研究』3，pp.43-59.

———（2000）「キリシタン資料における原因・理由を表す接続形式：ホドニ・ニヨッテ・トコロデを中心に」『筑波日本語研究』5，pp.92-104.

———（2002）「『応永二十七年本論語抄』の因由形式の階層」『筑波日本語研究』7，pp.63-81.

石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店.

大木一夫（2012）「不変化助動詞の本質，続貂」『国語国文』81(9)，pp.1-17.

小川志乃（2004）「カラニの一用法―接続助詞カラ成立の可能性をめぐって―」『語文』82，pp.47-59.

小田勝（1990）「中古和文における接続句の構造」『国学院雑誌』91(8)，pp.38-47.

———（1994）「接続句の制約からみた中古助動詞の分類」『国学院雑誌』95(7)，pp.16-25.

———（2006）『古代語構文の研究』おうふう.

尾上圭介（2001）『文法と意味Ⅰ』くろしお出版.

————（2012）「不変化助動詞とは何か―叙法論と主観表現要素論の分岐点―」『国語と国文学』89(3)，pp.3-18.

北﨑勇帆（2019）「「～（よ）うと」の一群の成立と展開」『日本語文法』19(1)，pp.3-19.

北原保雄（1981）『日本語助動詞の研究』大修館書店.

金田一春彦（1953）「不変化助動詞の本質」『国語国文』22(2,3)，pp.1-17・15-35.

栗田岳（2011）「「しづ心なく花のちるらむ」―ム系助動詞と「設想」―」『日本語の研究』7(1)，pp.16-31.

———（2014）「連体修飾のム―「思はむ子」をめぐって―」『東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』21，pp.15-27.

———（2019）「「助動詞ム」論」『国語語彙史の研究』38，pp.121-138.

小林賢次（1979）「中世の仮定表現に関する一考察 ―ナラバの発達をめぐって―」中田祝夫博士功績記念国語学論集刊行会（編）『中田祝夫博士功績記念国語学論集』勉誠社，pp.297-322.

————（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房.

小林千草（1973）「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94，pp.16-44.

近藤泰弘（1993）「推量表現の変遷」『言語』22(2)，pp.68-74.

重見一行（1988）「「む」は「推量」か」『国語国文』57(2)，pp.31-50.

鈴木浩（1990）「接続助詞「し」の成立」『文芸研究』64，pp.149-168.
高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房.
————（2005）「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』1(4)，pp.1-15.
鶴橋俊宏（2013）『近世語推量表現の研究』清文堂出版.
土岐留美江（1992）「江戸時代における助動詞「う」―現代語への変遷―」『都大論究』29，pp.37-49.
外山映次（1969）「条件句を作る「ウニハ」をめぐって」佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』表現社，pp.447-467.
中沢紀子（2004）「連体修飾節にみられるウ・ウズル」『筑波日本語研究』9，pp.55-68.
西田絢子（1978）「「けれども」考―その発生から確立まで―」『東京成徳短期大学紀要』11，pp.49-60.
野村剛史（1995）「ズ，ム，マシについて」宮地裕・敦子先生古稀記念論集刊行会（編）『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院，pp.2-21.
蜂谷清人（1971）「助動詞「う」「うず」「うずる」の語形･用法に関する一考察―狂言古本を中心に―」『国語学』86，pp.7-19.
————（1977）「狂言古本における仮定条件表現―「ならば」「たらば」とその周辺―」『成蹊国文』10，蜂谷清人（1977）『狂言台本の国語学的研究』笠間書院所収.
福嶋健伸（2011）「中世末期日本語の～ウ・～ウズ（ル）と動詞基本形―～テイルを含めた体系的視点からの考察―」『国語国文』80(3)，pp.44-64.
————（2014）「従属節において意志・推量形式が減少したのはなぜか―近代日本語の変遷をムード優位言語からテンス優位言語への類型論的変化として捉える―」益岡隆志ほか（編）『日本語複文構文の研究』ひつじ書房，pp.347-382.
三原健一（1995）「概言のムード表現と連体修飾節」仁田義雄（編）『複文の研究（下）』くろしお出版，pp.285-307.
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
矢島正浩（2003）「近世中期上方語における原因・理由表現」『国語と国文学』80(7)，pp.55-70.
————（2012）「条件表現史上における原因理由文の変化の意味」『国語国文学報』70，pp.36-11.
————（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院.
山口堯二（1991）「推量体系の史的変容」『国語学』165，pp.26-37.
————（1996）『日本語接続法史論』和泉書院.
————（1999）「「べし」の通時的変化」『京都語文』4，pp.186-205.
————（2000a）「中世末期口語における「べし」の後身―『天草版平家物語』の訳語による―」『仏教大学文学部論集』84，pp.55-68.
————（2000b）「『天草版平家物語』の「まじい」と「まい」―原文との対照から見た打消推量の助動詞統合の歩み―」『京都語文』5，pp.172-193.
————（2001）「「まい」の通時的変化」『仏教大学文学部論集』85，pp.29-42.
山田潔（2001）「助動詞「うず」の表現性」『玉塵抄の語法』清文堂出版，pp.110-189.
山本淳（2003）「仮定･婉曲とされる古典語推量辞「む」の連体形―『三巻本枕草子』にある「らむ」「けむ」との比較を中心に―」『山形県立米沢女子短期大学紀要』38，pp.47-62.
湯澤幸吉郎（1929）『室町時代言語の研究』大岡山書店.
————（1936）『徳川時代言語の研究 上方編』刀江書院.
————（1981）『増訂江戸言葉の研究』明治書院（初版 1954）.
吉田永弘（2007）「中世日本語の因果性接続助詞の消長：ニヨッテの接続助詞化を中心に」青木博史（編）『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房，pp.181-203.
————（2011）「タメニ構文の変遷 ムの時代から無標の時代へ」青木博史（編）『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版，pp.89-117.
————（2015）「「とも」から「ても」へ」秋元実治･青木博史･前田満（編）『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房，pp.299-320.

表１　ロドリゲス『日本大文典』のム系助動詞を含む活用とその周辺

	直説法	希求法	接続法	接続法（Domo, Tomo）	（Domo, Tomo）	条件的接続法	条件的接続法	可能法	可能法	許容法・譲歩法	許容法・譲歩法	不定法	動作状名詞・分詞
	未来	完全過去	未来	大過去	未来	大過去	未来	現在	未来	大過去	未来	未来	
肯定動詞１（話）	[p.32] Agueô / Agueôzu / Aguêôzuru / Aguetarôzu} [p.32]（完全未来・確実未来）Aguete arôzu / Faya Agueôzu}	[p.64] Agueô monouo / Aguetaraba yocarô monouo / Aguetarôniua yocarô monouo} // Aguetacatta monouo / Aguetai cotode atta monouo / Aguetacatta cotogia}（p.68 に詳説、Agueôtame. l. tote あり）[p.64]（大過去）Agueô monouo / Aguete arô monouo / Aguete attaraba yocarô monouo}	[p.69] Aguetarô / Aguetarôzu / Aguetarôzuru / Aguete arô Toqui} // Agueô zuruni, l. niua / Agueô toqui}（p.71 に詳説、Agueôtame. l. tote あり）	[p.75]（完全過去の形 Aguetaredomo などの他に）Aguete attaredomo / Aguete arôzuredomo / Aguêôzuredomo} // Aguete attatomo, l. tomama / Aguete arôtomo, l. tomama / Aguete attarebatote}	[p.76] Agueôzuredomo} // Agueôqueredomo / Aguete arôzuredomo} // Agueôtomo, l. tomama / Aguetaritomo}	[p.80] Aguete attaraba / Aguete atta naraba / Aguete attarônniua, l. nivoite ua / Aguetarôni coso}	[p.81] Aguru naraba / Agueôa} // Agueô / Aguêôzu / Agueôzuru {Naraba, niuoiteua} / Agueôniua	[p.85] Agueôca / Aguêô cotoca} // Agueôzu}// Agururô}	[p.85] Agueôzu / Aguru cotomo arôzu / Aguemo xôzu} // Agueôzurô}	[p.88] Agueô madeyo / Aguemo xômadeyo / Aguete ar itomo, l. tomamayo / Aguete araba tote}	[p.8] Agueô madeyo / Agueôtomo, l. tomamayo / Agueôzureba tote / Aguetari tomo / Aguetemo / Agueôni xei}	[p.81] Agueô / Agueôzu / Agueôzuru} Coto} // Agueô / Agueôzu / Agueôzuru} To}	[p.101]（動作状名詞・対格 Dum）Aguru tame. l. tote / Agueô tame. l. tote / Aguenî} [p.104]（目的分詞・対格 Vm）Aguru tame, l. tote / Agueô tame, l. tote / Aguenî} [p.105] Agueô mono, fito, ua, uo} // Agueôto suru mono} // Agueôto suruni, l. tocoroni} // Aguêôzuruni, l. tocoroni} // Aguêô toteno saquini}
肯定動詞２（話）	[p.124] Yomô / Yomôzu / Yomôzuru / Yomitarôzu} [p.124]（完全未来・確実未来）Yôde arôzu / Faya yomôzu}	[p.125] Yomô monouo / Yôde araba yocarô monouo / Yôdarôniua yocarô monouo} [p.125]（大過去）Yomô monouo 等 / Yôde arô monouo / Yôde attaraba yocarô monouo}	[p.126] Yôdarô toqui / Yôde arô toqui} // Yomôtoqui / Yomôzuruni} // Yôde {Cara / Yori / Nochi / Igo}	[p.128]（完全過去の形 Yôdaredomo など以外に）Yôde attaredomo / Yôde arôzuredomo yomôzuredomo} // Yôde aritomo / Yôde attatomo, l. mama / Yôde arôtomo, l. mama. / Yôde attareba tote}	[p.128] Yomôzuredomo} // Yomôquerdomo / Yôde arôzuredomo} // Yomôtomo, l. mama / Yôdaritomo}	[p.128]（過去の形 Yôdaraba など以外に）Yôde attaraba / Yôde atta naraba, l. ni voiteua / Yôde attarônniua, l. ni voiteua / Yôdarônicoso}	[p.129] Yomaba / Yomunaraba / Yomô, zu , ru, naraba, l. ni voiteua / Yomôniua} // Yôdaraba / Yôdani voiteua / Yôde araba}	[p.129] Yomôca? / Yomô cotoca?} //Yomôzu} // Yomurô}	[p.130] Yomôzu / Yomucotomo arôzu / Yomimo xôzu} // Yomôzurô}	[p.130] Yomô madeyo / Yomimo xômadeyo / Yôde attari tomo, l. tomama / Yôde attareba tote}	[p.131] Yomô madeyo / Yomôtomo. l. tomamayo / Yomôzureba tote / Yôdari tomo / Yôdemo / Yomôni xei}	[p.131] Yomô, zu, zuru, coto} / Yomô, zu, ru, to}	[p.132]（動作状名詞・Dum）Yomutame, l. tote / Yomôtame, l. tote / Yomini} （目的分詞・Vm）Yomu tame, l. tote / Yomô tame, l. tote / Yomini // （未来）Yomô mono, fito, ua, uo} / Yomôto surumono} / Yomôto suruni, l. tocoroni} / Yomôzuru tocoroni} / Yomôtoteno saquini}
肯定動詞２（話）	[p.141] Narauô / Narauôzu / naraôôzuru / Narôtarôzu}	[p.142] Narauômonouo / Narôtaraba yocarô monouo / Narôtarôniua yocarô monouo} // Naraitacatta monouo / Naraitai cotode atta monouo / Naraitacatta cotogia} [p.142]（大過去）Narauô monouo, 等 / Narôte arô monouo / Narôte attaraba yocarô monouo}	[p.143] Narôtarô, zu, ru, toqui / Narôte arô toqui} //Narauô toqui / Naraôzuruni}	[p.144]（完全過去の形以外に）Narôte attaredomo / Narôte arôzuredomo Narauôzuredomo} // Narôte attaritomo / Narôte attatomo, l. mama / Narôte arôtomo, l. mama / Narôte attarebatote}	[p.145] Narauôzuredomo / Narauôquerdomo} // Narôte arôzuredomo} // Narauôtomo, l. mama / Narôtaritomo}	[p.145] Narôtaraba / Narôte attareba / narôte atta naraba, l. ni voiteua / Narôtarôniua, l. nivoite ua / Narôtarôni coso}	[p.146] Narauaba / Narô naraba, l. ni voiteua / Narauô, zu, ru, naraba, l. ni voiteua} // Naraôniua / Narôtaraba, l. ni voiteua / Narôte araba}	[p.146] Narauôca? / Naraôcotoca?} //Narauôzu} / Narôrô}	[p.146] Narauôzu / Narôcotomo arôzu / Naraimo xôzu}	[p.147] Narauô madeyo / Naraimo xô madeyo / Narôte attaritomo, l. mama / Narôte attareba tote}（不完全過去にも Narauôto, l. mamayo. あり）	[p.147] Narauô madeyo / Narauôtomo, l. mamayo / Narauôzureba tote} //Narôtaritomo / Narôtemo / Narauôni xei}	[p.148] Narauô, zu, ru, coto} // Narauô, zu, ru, to}	[p.149]（動作状名詞・Dum, 目的分詞・Vm）Narô tame, l. tote / Narauô tame, l. tote / Naraini（未来）Narauô mono, fito, ua, uo} / Naraôto suruni, l. tocoroni} // Naraôzuruni, l. tocoroni} // Naraôtote no saquini}
肯定形容詞（話）	[p.192] Fucacarô, zu, ru / Fucô gozarô, ru, zu} [p.207]（形容動詞）Aquiracanarô, zu, ru / Aquiracaniarôzu}	[p.196]（完全過去及び大過去）Fucacattaraba yocarô monouo / Fucacarômonouo / Fucacarônniua yocarômonouo}	[p.197] Fucacarôzuruni / Fucacarô toqui / Fucô natte cara, l. nochi}	[p.198] Fucacattaredomo / Fucacarôzuredomo Fucacattareba tote}	[p.198] Fucacarôzuredomo / Fucacarô tomo, l. tomama}	[p.199]（不完全過去及び大過去）Fucacattaraba, Fucacatta naraba, l. ni voiteua}	Fucacarô naraba / Fucai naraba, 等。その他現在形 }	-	-	[p.199]（下位分類なし）Fucacarôzu / Fucô gozarôzu / Fucô fozarucotomo arôzu / Fucô gozattacotomo arôzu / Fucacattçurô / Fucacarôzu rô}	[p.199]（下位分類なし）Fucaiamadeyo / Fucaiqua fucaimadeyo / Fucaito mamayo / Fucaitomo / Fucaquerebatote / Fucacarô madeyo / Fucacarô tomo}	[p.200] Fucacarô, zu, ru / Fucacarôcoto, l. to}	[p.201]（未来分詞）Fucacarô, zu, ru {Va, Monoua, Fitoua, Cotoua}
否定存在動詞 Nai	[p.25] Nacarô / Nacarôzu / Nacarôzuru}	[p.25]（過去）Nacarômonouo / Nacattaraba yocarô monouo}	[p.26] Nôte cara / Nacarô toqui}	[p.26]（過去）Nacattaredomo}	[p.26] Nacarôzuredomo}	（現在・過去のみで該当例なし）	-	（可能法なし）	-	[p.26]（下位分類なし、参考）Nôtemo / Naqutomo, l. tomama, l. toyû tomo / Naquerebatote / Nacattaraebatote}	-	-	-
存在動詞 DEGOZ ARV	[p.17] Degozarô / Degozarôzu / Degozarôzuru} [p.17]（完全未来・確実未来）Faya degozarôzu}	[p.18] Degozattaraba yocarômonouo / Degozattarô niua yocarômonouo} [p.19]（大過去）Hâ degozarô monouo / Degozattaraba yocarômonouo}	[p.19] Degozattarô toqui / Degozarô toqui / Degozatte cara, l, nochi}	[p.21] Degozatte attaredomo / Degozattaritomo}	[p.21] Degozarôzuredomo/ Deozarôtomo}	[p.22]（完全過去及び大過去）Degozattaraba / Degozatta naraba, l, ni voiteua / Degozatte attareba}	[p.22] Degozarônaraba / Degozaraba / Degozattaraba / Degozatte raba}	[p.22] Degozarôca?} // Degozarôzu / Degozarurô}	[p.22] Degozarôzu / Degozarucotomo arôzu / Degozarôzu rô}	[p.23] Degozattaritomo / Degozattaraba, degozattamadeyo / Degozattemo / Degozarô madeyo}	[p.23] Degozarôtomo / Degozarômadeyo / Degozaraba, degozarômadeyo}	[p.24] Degozarô coto / Degozarô to} //（未来分詞）Degozarô mono, l, fito}	-
存在動詞 Soro, Sôrô	[p.213] Sorobequ soro / Sôrôbequi, l. bexi / Bequ soro / Sorouan, l. fan / Sôrauan / Sorozuru}	[p.216]（過去）Sorouanmonouo / Sôraitçuran monouo / Sôraixi monouo}	[p.216] Sorouantoqui / Soroanzuru toqui / Sôrai te yori, nochi, igo}	[p.217]（過去）Sorotçuredomo / Sôraixica domo / Sôraixito iyedomo / Sorouanuo / Sorouanzuredomo} // Sôraixi totemo / Sorotemo / Sôrôto yûtomo}	[p.217] Sorozuredomo / Sorozuruuo / Soroa~zure domo / Sorobequeredomo} // Sorouan totemo / Sorofannimo}	[p.217] Sorozuredomo / Sorozuruuo / Soroa~zure domo / Sorobequeredomo} // Sorouan totemo / Sorofannimo}	[p.217]（過去）Sôrai xini voiteua / Sôrai xicaba}	-	[p.217]（下位分類なし）Sôrôran / Soraitçuran / Sôrôbequi, l.bexi	-	-	-	[p.218] Sorouan coto} // Sorouanto / Sorobequiyoxi / Bequsoroyoxi / Sôrôbequito}	[p.218]（動作状名詞・Dum）Sôrôtame / Sorouantame, l. tote / Sôrôbequi tame / Bequsoro tocoroni}（分詞）Soro mono ua, 等 } // Sorouanzuru mono, 等 }
肯定動詞（書）	[p.158] Agubequ, bequi, bexi / Aguen, zu, ru / Aguenan, zu, ru / Aguetaran, zu, ru/ Aguebaya}	[p.172]（過去）Agubequi monouo / Aguetaranniua}	[p.173] Aguequereba / Agubequinareba} //Aguetarantoqui / Agubequitoqui / Agubequini} // Aguetecara, yori, nochi}	[p.174]（過去）Aguetaredomo / Aguequeredomo / Aguetçuredomo / Aguenuredomo / Aguexicadomo / Aguruto iyedomo / Aguetaritoiyedomo} // Aguetaritomo / Aguetarebatote / Aguetçurebatote}	[p.174] Aguequeredomo / Agubequitoiyedomo} // Aguetaritomo / Agubequereba tote}	[p.174]（過去）Aguetaraba / Aguetaruni voiteua / Aguete araba / Aguexicaba}	[p.174] Aguru naraba / Agueba / Agubequua / Agennî voitreua / Agubequmba} // Aguetaraba / Aguetaranniua / Aguete araba}	[p.174] Agubequiya? / Aguen cotoya?} // Agubexi, l. bequi / Aguen} // Agururan}	[p.175] Aguen, zu, ru} // Aguran/ Aguenzurā}	[p.175]（過去）Aguetaritomo / Aguequereba tote / Aguetçureba tote}	[p.175] Agubequereba tote / Aguetari tomo}	[p.175] Agubequi coto / Aguen coto} // Agubequi yoxi / Aguento}	[p.176]（動作状名詞・Dum）Aguru tame, l. tote / Agubequitame, l. tote}（未来）Agubequi mono} // Aguento suru mono} // Aguento surun} // Agubequini / Aguen ni}
肯定形容詞（書）	[p.209] Fucacarubequi, l. bexi / Fucacaran / Fucacarixi / Fucacarinâ}	[p.209]（過去）Fucacaran monouo / Fucacaranniua yocarubequi monouo}	[p.209] Fucacaru bequini / Fucacaru bequi toqui / Fucacarantoqui / Fucacaru bequereba}	[p.209]（過去）Fucacari queredomo / Fucacarixi queredomo}	[p.209] Fucacaru bequeredomo / Fucacaru bequtomo	[p.210] Fucacarixicuaba	[p.210] Fucacaranni voiteua / Fucaquua / Fucaqumba}	[p.210]（下位分類なし）Fucacarubexi / Fucacaruran / Fucacaritçuran / Fucacaranzuran}	-	[p.210]（下位分類なし）Fucaqutomo / Fucaquerebatote}	-	[p.210] Fucacarubequi coto / Fucacarubequito	[p.210]（該当例なし？）
否定動詞１（話）	[p.108] Agurumai, l. majij / Aguemai, l. maji} [p.109]（完全未来・確実未来）Aguci de arô / Mada Aguru mai / Agueta coto arumai}	[p.115]（完全過去・大過去）Agurumai monouo / Ague nandaraba yocarô monouo}	[p.116] Aguenu {saquini, l. ijennni, l. mayeni / Agueide} // Aguemaini / Aguemai sacaini}	[p.117] Aguenandaredomo / Aguemajiqueredomo / Agueide attaredomo / Agueide arôzuredomo} Agueide attari tomo / Agueide attarebatote / Agueide arôtomo, l. tomama}	[p.117] Aguemajiqeredomo} // Aguci de arôzuredomo} // Aguemai tomo, l . tomama}	-	[p.118] Aguemai naraba / Aguemajiqua}	[p.118] Aguemaica? / Aguemai cotoca} // Aguemai, l. maji / Agurumai, l. maji}	[p.119] Aguemai, l. maji / Aguenu cotomo arôzu}	[p.119]（過去）Aguenandaritomo / Aguenandareba tote / Aguenandani xei} // Aguenanda madeyo / Agueimadeyo}	[p.119] Aguemai madeyo / Aguemaini xeyo}	[p.120] Aguemai coto / Agurumaicoto} // Aguemai, l. majito / Agurumai, l. majito}	[p.120]（動作状名詞・Dum）Aguenu tame, l. tote / Aguemai tame, l. tote} [p.121]（現在分詞）Aguemai, l. maji mono} // Aguemaji tocoroni / Agu, l. agueimaini}
否定動詞２（話）	[p.134] Yomumai / Yomumaiij} [p.134]（完全未来・確実未来）Yomaide arô / Mada yomumai / Yôda coto arumai}	[p.135]（完全過去・大過去）Yomumai monouo / Yomanandaraba yocarô monouo}	[p.136] Yomanu {Saquini, / Ijennni, / Mayeni} // Yomaide / Yomumaini / Yomumai sacaini}	[p.136] Yomanandaredomo / Yomaide attaredomo / Yomaide arôzuredomo / Yomumaji queredomo} // Yomaide attaritomo / Yomaide attareba tote / Yomaide arô tomo, l. mama}	[p.136] Yomumajiqueredomo} // Yomaide arôzuredomo} // Yomumaitomo, l. mama}	-	[p.137] Yomumai naraba / Yomumajiqua}	[p.137] Yomumaica? / Yomumai cotoca?} // Yomumai, l. maji}	[p.138] Yomumai, l. maji / Yomanu cotomo arôzu}	[p.138]（過去）Yomanandaritomo / Yomanandareba tote / Yomanandani xei} // Yomananda madeyo / Yomumai madeyo}	[p.138] Yomumai madeyo / Yomumaini xeyo}	[p.139] Yomumai coto / Yomumaito}	[p.139]（動作状名詞・Dum）Yomanu tame, l. tote / Yomumai tame, l. tote} [p.140]（未来）Yomumai, l. majimono, fito} //Yomumaji tocoroni / Yomumaini}
否定動詞３（話）	[p.150] Narômai, l. maji} [p.150]（完全未来・確実未来）Narauaide arô / Mada narômai / Narôta coto arumai}	[p.151]（完全過去・大過去）Narômai monouo / Narauanandaraba yocarô monouo}	[p.152] Narauanu {Saquini, / Ijennni, / Mayeni} // Narauaide / Narômaini / Narômai sacaini}	[p.152] Narômajiqueredomo / Narauanandaredomo / Narauaide attaredomo / Narauaide arôzuredomo} // Narauaide attaritomo / Narauaide attareba tote / Narauaide arô tomo, l. mama}	[p.152] Narômajiqueredomo} // Narauaide arôzuredomo} // Narauamai tomo, l . tomama}	-	[p.153] Narômai naraba / Narômajiqua}	[p.154] Narômaica? / Narômai cotoca?} // Narômai, l. majij}	[p.154] Narômai, l. maji / Narauanu cotomo arôzu}	（過去のみで、該当例なし）	[p.154] Narômai madeyo / Narômaini xei}	[p.155] Narômai coto}// Narômai, l. majito}	[p.156]（動作状名詞・Dum）Narômai（Narauanu と誤る）tame, l. tote / Narauanu tame, l. tote（未来）Narômai mono, fito} // Narômai tocoroni / Narômaini}
否定形容詞（話）	[p.202] Fucacarumai, l. maji / Fucô arumai, l. maji}	[p.203]（過去）Fucacarumai monouo / Funanarazumba yocarô monouo}	[p.203] Fucacarumai toqui / Fucô nôte cara, l. nochi}	[p.204] Fucacaranandaredomo / Fucô nacatte attaredomo / Fucacaranandarebatote / Fucacarumajiqueredomo}	[p.204] Fucacarumai, l. majiqueredomo / Fucô arumaiquerdomo / Fucacarumai tomo, l. tomama}	[p.205]（不完全過去・完全過去・大過去）Fucacarananda naraba / Fucacarananda naraba / Fucacaranandani voiteua}	[p.205] Fucacarumai, l. majinaraba. / Fucacaranuni voiteua}	[p.205] Fucacarumai, l. maji / Fucô nai cotomo arôzu / Fucô nacatta cotomo arôzu / Fucô arumai}	（未来の項なし）	[p.205]（下位分類なし）Fucacaranu madeyo / Fucacarazuua Fucacaranu madeyo / Fucacarumaito mama} // Fucacarazutomo, l. tomama / Fucacaraneba tote / Fucacarumai madeyo}	-	[p.206] Fucacarumai, l. majicoto / Fucacarumai to}	[p.206]（動作状名詞・Dum）Fucô naranu / Fucô narumai Fucacarumai} Tame, l. tote（未来）Fucacarumai {Va, Monoua, Fitoua, Cotoua}
否定存在動詞 Soro	[p.219] Sôrômaji / Soromajiqu soro / Becarazu soro}	-	[p.219] Sôrô majiqui toqui / Sorounu vchi, aida}	-	[p.217]（未来）Soromajiqueredomo / Sôrô becarazaredomo}	-	[p.220] Majiqu sôrauaba	-	-	-	-	[p.220] Sôrômajiqui coto} // Soromajiquito}	[p.220]（動作状名詞・Dum）Sorouan utame / Soromajiquitame, l. tote}
否定動詞（書）	[p.177] Ague majiqui / Agubecarazu / Agubecarazaru / Aguezaran / Agueji}	[p.178]（過去）Agu, l. Aguemajimonouo}	[p.178] Aguemajiquereba / Aguemajiquini}	[p.178]（過去）Aguezari xicadomo}	-	[p.178]（過去）Aguezari xicaba}	[p.178] Aguemajiquereba / Agu, l. Aguemajiquua}	（p.179「許容法及び可能方は、話しことばに於いて整理された所と同じ」）	-	-	-	[p.179] Agu, l. Aguemaji coto / Agubecarazaru coto} // Agu, l. Aguemaji qui yoxi / Agubecarazaru mune}	[p.179]（動作状名詞・Dum）Agumaji qui tame, l. tote}（未来）Aguemajiqui mono / Agubecarazaru mono} // Aguemaji quini / Agumajiqui tocoroni}
否定形容詞（書）	[p.211] Fucacaru becarazu / Fucacarazaran / Fucacaraji / Fucacaru majiqu, qui	[p.211]（下位分類なし）Fucacarazare caxi / Fucacaru majiqui monouo}	[p.211] Fucacarumajiquereba	[p.211]（過去）Fucacarizarixicadomo	[p.211] Fucacarumajiquere domo / Fucacarazaru bequeredomo	[p.212]（過去）Fucacarazarixicaba	[p.212] Fucacarumajiquua	-	-	-	-	[p.212] Fucacarumajiqui coto, l. to	-

1　p.77 に詳説、「未来と共に使はれた Domo は、往々義務があるといふ意味を示す。」
2　p.113「Ximo のある地方では、Agueji, Yomaji, Narauaji といふ書きことばの未来の言ひ方を用ゐる」